日本の野球独立リーグに関する研究

A study on Japanese Independent Baseball Leagues

1K04B048-0　　小柳　洋也

指導教員　　主査　原田宗彦先生　　副査　木村和彦先生

目的

本研究の目的は、日本初の野球独立リーグで今年3年目のシーズンを終えた「四国アイランドリーグ」と、今年で1年目のシーズンを終えた「北信越ベースボールチャレンジリーグ（BC リーグ）」を、観客動員や理念といった様々な観点から比較・分析し、両リーグの強み、弱みなどの特徴を明らかにすることにある。そして、そこから得られたデータをもとに、両リーグに対して今後への提言を行う。

方法

両リーグを比較・分析するために、ウェブサイトや関連書籍での調査と、両リーグ関係者へのインタビュー調査の二つの方法で情報を集める。そしてそこで得られた情報を、SWOT 分析を用いて分析し、その結果を両リーグの提言につなげる。

結果

＜北信越ベースボールチャレンジリーグの SWOT 分析＞

・Strength
　① スタジアムの整備
　② アルビレックス新潟のノウハウ
・Weakness
　① 気候の悪さ
・Opportunity
　① 群馬県の参入
・Threat
　① 他競技のスポーツチームとのファンの取り合い

＜四国アイランドリーグの SWOT 分析＞

・Strength
　① 3年間の実績
・Weakness
　① 人口の少なさ
・Opportunity
　① 九州への進出
・Threat
　① 経営の不安定さ

考察

＜北信越ベースボールチャレンジリーグへの提言＞

① 各県中心部での試合数増

北信越 BC リーグは「各県全域での試合開催」を掲げており、実際に四国アイランドリーグに比べ各県全域で試合を行なっているが、球場間での観客動員数にはかなりの開きがある。そこで、より多くのチケット収入を得るためには、人口が多く人が集まりやすい各県の中心部での試合を増やす必要がある。ただ、スポンサー獲得の関係もあり、遠隔地での試合数をゼロにすることは出来ないため、あくまで試合数を「減らす」方向で考えなければいけない。

② 野球レベルの向上

今年のリーグ戦では、シーズン中盤で上位2チームと下位2チームで大きなゲーム差が出来、白熱した優勝争いを繰り広げることが出来なかった。また、試合序盤で大差がつく試合も目立ち、チーム間のレベルの違いが最後まで観客をひきつけられない原因ともなった。シーズン初めや優勝決定戦には1試合5000人を集める試合も幾つかあっただけに、人々の関心が無いわけではないことが分かる。後は、関心をもってくれた人をいかにシーズン終盤までひきつけられるかが大切である。そのためにはまずリーグ全体のレベルの底上げが必要だと考える。

＜四国アイランドリーグへの提言＞

① 更なる試合数削減

四国アイランドリーグは来年から九州への移動などを考慮し、現行の180試合から160試合に削減する。しかし、現在のリーグの持つ集客力ではまだ負担が大きいように思う。更に試合数を削減することで1試合あたりの価値を高めることができ、また週末でも野球教室など地域との交流時間を増やすことが出来る。特に高知に関しては今年度の平均観客動員が563人とまだまだ地域に定着したとはいえないだけに、野球教室のような草の根活動が必要だといえる。